

令和8年度 第1回苫小牧市スポーツ推進審議会結果報告書

【日時】 令和8年8月18日（火）18時00分 ～ 18時50分

【場所】 市役所5階 第2応接室

【出席】 ▽苫小牧市スポーツ推進審議会委員 11名（12名中）

本間会長、中村副会長、荒井委員、石田委員、伊藤委員、松苗委員、

植村委員、中村峰子委員、西田委員、米山委員、林崎委員

※欠席 藤岡委員

▼事務局（市）

山田総合政策部長、神保観光スポーツ室長

スポーツ都市推進課：森田担当課長、伊藤課長、田中主査、山岸主査、丸谷主査、

石山主事、川村主事、前田主事

～～～以下議事要旨～～～

1 開 会

2 会長挨拶

3 委嘱状の交付

- ・ 新任委員である松苗委員に、山田総合政策部長から委嘱状を交付した。
- ・ 交付後、松苗委員から自己紹介をいただいた。

4 議 事

(1) 第1期苫小牧市スポーツ推進計画の総括について

- ・ 事務局（山岸主査）から資料1、資料2、資料3について説明があった後、本間会長から各委員に意見を求めたところ、以下の発言があった。

▽西田委員

- ・ スポーツ習慣化促進事業の企業訪問教室について詳しく聞きたい。アンケートでは20代、30代、40代のスポーツ実施率が非常に低く、理由として仕事や時間がないことが挙げられている。したがって企業と連携してスポーツを推進する取り組みが必要であると考える。

- ・現在、どの企業にどのようなトレーナーを派遣する予定か、申請方法など決まっていることがあれば教えてほしい。

▼事務局（山岸主査）

- ・スポーツ習慣化促進事業は、令和6年度からスポーツ庁の補助金を受けて進めている事業である。今年度はトヨタ自動車北海道、大鎮キムラ木村建設、もも花幼稚園、美容室経営会社（RIPLA）など計5社に応募いただいている。先週、幼稚園が開始し、他企業はこれから進めていく状況である。

▽西田委員

- ・トヨタなどの企業でのトレーニング内容はどのようなものか。

▼事務局（山岸主査）

- ・昨年度はボクササイズなどのトレーニングを実施した。

▼事務局（伊藤課長）

- ・資料1の6ページにスポーツ習慣化促進事業が記載されている。レッドイーグルス北海道、21世紀総研、都市総合開発とのコンソーシアムで事業を実施している。スポーツ庁の補助金を受けているが、補助金の条件として地域資源活用が求められ、レッドイーグルス北海道のアイスホッケーを苫小牧市の資源として活用している。令和6年度と7年度はアイスホッケー教室を開催したが、民間運営が可能となったため今年度は実施していない。

▽中村副会長

- ・今回の5社はどのような経緯で選ばれたのか。

▼事務局（山岸主査）

- ・SNSや広報誌で周知し、申し込みを受けた形であるが、レッドイーグルス北海道からスポンサー企業に周知した経緯もある。

▽中村副会長

- ・企業を巻き込むことは福利厚生としても良い取り組みと思う。ただ、あまり知られていないようなので、周知方法に改善の余地があるのではないか。

▽松苗委員

- ・資料1の13ページの「八地区スポーツフェスティバル」が令和7年度で終了したとのことだが、参加人数は多いように見える。終了の理由は何か。

▼事務局（伊藤課長）

- ・「八地区スポーツフェスティバル」はスポーツ都市宣言10周年から開始し、市内を八地区に分けて運動会やスポーツイベントを実施した。町内会やスポーツ推進委員の協力で運営したが、町内会役員の高齢化により運営者の負担が大きいとの声、温度感の低下や形骸化の声もあり、令和7年度をもって終了した。
- ・今後は、スポーツフェスティバルやパラスポーツ教室などで市民のスポーツ参加機会を確保していく。

▽松苗委員

- ・何か施策をやるには、それを運営する人の力が必要になってくるのであるが、町内会の方の高齢化により難しいというのは私が関わった違うプロジェクトでも懸念されていた。
- ・何かそういったものを私ども企業の方で何かサポートができればなと思ったので、何か連携できることがあれば。

▽中村峰子委員

- ・「八地区スポーツフェスティバル」の話であるが、開始当初はスポーツのきっかけづくりであった。最初は地域にスポーツ推進委員がいること自体を知らない人が多かったが、何とか地域でいろいろなスポーツを進めることによって、こういった形で参加できるのだという認識が広まってきた。しかし、対象が高齢者に偏ってきているため、継続が困難な状況となっている。また、地域の小学校の児童数も減少し、子どもたちが日曜日や土日に参加する機会が減っている。そのため、スポーツの普及がもっと広がるべきところで行き詰まってしまった部分があると考えている

▽松苗委員

- ・一つの施策や事業を運営できるほどの人数はいないが、フィットネスクラブにいるトレーナーを活用して、何らかの連携ができたらと考えている。

▽本間会長

- ・現在、スポーツ協会では「市民スポーツ祭」として、複数の加盟団体と連携しながらフロアカーリングやパークゴルフなどの大会を開催しており、全てではないが「八地区スポーツフェスティバル」で実施されたものも含まれている。
- ・これらの活動を広く周知し、一人でも多くの人が多様なスポーツに参加できるよう推進していく方針である。

5 その他

(1) スポーツ都市宣言 60 周年記念事業について

(2) 北海道日本ハムファイターズ2軍施設誘致について

(3) Jリーグ名古屋グランパス夏季キャンプについて

以上について、事務局（伊藤課長）から説明があった後、本間会長から各委員に意見を求めたところ、以下の発言があった。

▽本間会長

- ・名古屋グランパスの件だが、愛知名古屋からの来訪者が多いとのことだが、市内に宿泊していたのか。

▼事務局（伊藤課長）

- ・土日やトレーニングマッチの際に実施したアンケート結果によると、名古屋からの来訪者が6割程度で一定数市内に宿泊された方もいた。

▽本間会長

- ・このようなキャンプとかイベントがあったときには、経済効果があったのかどうかという話になってくるがどうなのか。

▼事務局（伊藤課長）

- ・現在、内部で経済効果の試算を行っており、正確な数字についてはまだ公表できないものの、一定の効果があったと認識している。

▽荒井委員

- ・この委員を拝命いただいたことを契機に、総合体育館などの運動施設を利用してみた。

初めて利用する施設であっても、各施設の工夫としてトレーナーによる指導や案内の張り紙などがあり、利用しやすいと感じた。私自身、日中は仕事をしており、家族との時間などもあってスポーツを行う時間がなかなか取れなかったが、日常的に週に一回でも通うことや、家族や身近な人に一緒に行くことを勧めたり、公園を一周してみたり少しずつきっかけを作って取り組んでいきたいと考えている。

- ・スポーツ都市宣言 60 周年のイベントも多く開催されるようなので、仲間や家族を誘い参加したいと思っている。

▽石田委員

- ・グランパスに関連してだが、以前、この推進会議でレポートを提出したことがあるが、その中で市民の健康増進だけがスポーツ都市宣言の目標ではないと思っている。

例えば、今回のグランパスキャンプでは 300 人から 500 人程度の観戦者がいたようだが、それによってスポーツを知る、スポーツに関わるということが大事なのではないか。先日 J リーグの開幕戦がテレビでやっていたが、老若男女問わず 6 万人が熱狂していたし、オリンピックやワールドカップでも多くの人々がスポーツに熱中していた。なかなか我々にとって身近なものではないので、身近で感じることをするという視点も重要であると考える。

- ・苫小牧でもマラソン大会をやっているが、16 万規模の自治体でも、1 万人程度が参加する大会もある。どうやっているかという点で官民だけでなく、テレビ局を巻き込み、タレントを招いたり、ボランティアにも商品券やグッズを提供するなど多様な工夫をしている。先ほど事務局が紹介しなかった事業の中には、6 年度と比較して参加人数が減少しているものもある。参加者を増やすことも重要だが、係員や運営側の人数も載せて、事業が盛り上がったという報告があっても良いのではないか。
- ・J リーグがやっとヨーロッパや世界基準となったのでこれからは海外のチームを呼ぶこともできるのではないか。以前、シンガポールのチームがアジア大会に向けて苫小牧での練習を検討しているとの話を聞いたことがある。その時は、受け入れ体制やグラウンド問題があり実現しなかったのかもしれないが、今年は、ヨーロッパは非常に暑かった。苫小牧は本州や札幌と比べ 10 度近く低いので、今は海外からの注目は高まっていると思われる。

なので、もっと踏み込んで多くの人を呼び込み、関わる人を増やすことが重要ではないか。

▽伊藤委員

- ・アブロス日新温水プールのことであるが、ボイラーの修理のためプールが使用できない時期がある。私が子どもを育てている際に連れて行った施設なので老朽化しているのは当然のことだ

が、場所も非常に良いところにあるので、何とか維持していただきたい。

- ・また、私事であるが、昨年シルバーリハビリ体操指導士の資格を取得し、苫小牧市長より修了証書を授与された。10月23日に市民文化ホールでイベントが開催される予定である。この体操を聴覚障害者にも伝えたいと考えているがまだ課題が多く、こうした機会をきっかけにぜひ参加してほしいと願っている。

▽松苗委員

- ・冒頭の説明の中で、市が掲げた目標数値に届いていないとの報告があり、西田委員からは20代から40代の参加率が低下しているとの話もあったが、実はフィットネス業界の話を見ると、業界全体では参加率が右肩上がりですり上昇しており、特に20代、30代、さらには10代の参加率が非常に伸びているところを考慮すると、正直なところギャップが存在していると感じた次第である。わざわざお金を払ってフィットネスクラブに通う人が増えている一方で、市の統計で見ると市民の参加者数は減少しているということだが、市の事業には、お金を払わずに参加できるものがあるにもかかわらず参加者数が減少しているその原因は何かと考えながら参加していた。
- ・私どもでは、これから子ども向けの事業に力を入れていこうと思っているが、参加者数を集めるのに苦労しており、その原因として考えられるのは、認知度の低さである。広告費を投入しながら活動しているが認知が広がっておらず、参加者が集まっていないという背景がある。スポーツ推進委員会の存在自体の認知度が低いということで、私も恥ずかしながら存じ上げていなかった部分である。私どもは会員制のクラブなので、例えばそのような活動があることをクラブ会員に対してLINEやSNSを用いて周知することは可能であると考えているので、ぜひ連携を図り、協力させていただきたいと考えている。

▽植村委員

- ・まず個人的に日本ハムファイターズが苫小牧に来なかったことは非常に残念である。ファイターズとしては、北広島や恵庭に近いので、2軍の選手がすぐ行けるという意味では良かったのかもしれないが、今後の楽しみという観点では少し薄れた気がする。
- ・医師会としては、ノーザンホースパークマラソンや、9月から始まるアイスホッケーのリンクドクターとして、サポートをさせていただいている。スポーツを普及するという意味では、我々の会はなかなか貢献できるとは思わないが、選手の健康管理であったり、試合やイベント当日のアクシデントに対して市立病院や王子病院などの基幹病院への速やかな搬送体制を整えている。この体制を今後も可能な限り継続し、皆様と協力していければと考えている。

▽中村副会長

- ・人気があるものに関しては参加者が増えている状態で、人気がないということではないかもしれないが参加者が減少しているもの多々ある。かつてとは異なり、ニーズの種類がどんどん増えており、そのすべてに対応しようとするのはかなり困難である。そこで、先ほど石田委員が述べたように、支える人を増やすというのも課題なのではないか。パラスポーツ推進委員会でも指摘されたが、現時点でスポーツをしている人は、何かイベントがあれば積極的に参加する。一方で、現段階でスポーツに参加していない人の中にはスポーツを知る機会がなく自分もスポーツができるという認識を持っていない人もいる。障がいがあってもできるスポーツが出てきているが、それを実施できる環境が整っていないということもある。
- 参加者数などの数字に表すと修正していく必要があるように見えるかもしれないが、数字にこだわらず、色んなニーズに応えるために続けていくものもあっていいのではないか。

▽中村委員

- ・スポーツ推進委員会としては、フロアカーリングを長年にわたり普及してきた経過がある。ボッチャはパラリンピックで注目され、最近では障がい者と一般の方が一緒に参加できる大会も開催されている。さらに、モルックについても近年普及が進んでおり、老人クラブにおいても今年大会が予定されていると聞いている。フロアカーリングやボッチャの用具は高価だが、モルックは安価で、子どもから高齢者まで幅広い年代が楽しめる競技であるため、ぜひ多くの方に体験していただき、大会やイベントに参加いただけることを期待している。

▽西田委員

- ・3月に開催されたパラスポーツ体験会に家族で参加させていただいた。どのスポーツも誰もができる内容であり、一日を楽しく過ごすことができた実感している。特に、母は普段スポーツをする機会が少ないため、このような機会を通じて触れ合うことができたのは貴重であった。
- ・数値に関する話題に戻るが、目標値の一つに「児童生徒の75%が運動・スポーツを好きになることを目指す」という項目がある。しかし結果としては約60%であり、目標には達していなかった。先ほどお金を払ってでもスポーツをしたい人がいるという話があったが、そのとおりで、好きじゃない、親しんでいない人達をいかに取り込むかが大事なんだろうなと考えているがなかなか良い案はないが、やはり子どもの頃からスポーツに親しんでもらうことで大人になってからも継続的にスポーツに携わってくれると思う。私自身も沼ノ端小学校のPTAと協力し、放課後子ども教室というものを年に4回ほど開催している。そこでは野球や陸上など様々なスポーツを体験できる機会を提供しており、少年団に所属していない子どもも参加してもらう約20

名程度参加しているが、もっとたくさん集まってくれるようにしたいので周知などを願いたい。

- ・部活動の地域移行だが、中学生の段階でクラブチームに所属し本格的にスポーツを行う子どもも一定数存在するが、中学校から新たにスポーツを始めたい、あるいは気軽にスポーツを体験したいという子どもに対しては、部活動のような受け入れ先の整備が必要であると考えている。部活動を廃止する方針は変わらないと思うが、現在、認定クラブに対して交付している助成金を拡充するなど引き続き支援をしていただき、部活動に準じたような取り組みを今後も残していきたいと考えている。

▽米山委員

- ・アイスホッケーの話になるが、長年にわたり、苫小牧はアイスホッケーの合宿地として利用されてきた。私は選手としては既に引退しているが、選手時代に苫小牧の充実した環境でアイスホッケーに取り組めたことに深く感謝している。また、レッドイーグルス北海道との協働事業は回を重ねるごとに洗練され、アイスホッケーを通じて地域の方々との交流や地域貢献を深める機会となっている。選手側からすると、自ら積極的に地域の方々に関わりに行くことは難しい場合が多く、依頼を受けて初めて関わるケースが多かった。現役時代の私もそのように感じていたが、この協働事業に参加することで地域の方々と触れ合い、アイスホッケーを通じて交流できる貴重な機会を得られていることを大変嬉しく思っている。さらに、地域の応援は選手にとって大きな励みとなるため、現役時代にもっと多くのこうした事業に参加したかったと感じている。選手がこれらの活動に参加することは学びの機会となり、応援を得る力にもつながるため、今後も積極的に声をかけていただきたいと考えている。
- ・名古屋グランパスのキャンプ受け入れに関しても、SNS 等での情報発信が増え、市の公式 LINE などでもスポーツ関連の大会情報が多く見られるようになった。今後もこうした広報活動が継続され、さらに多くの市民がスポーツに触れる機会が拡大することを期待している。
- ・恵庭に住んでいるため、ファイターズのことを話のはあれだが、苫小牧がすごい盛り上がっていると感じていた。結果としては残念に思うものの、市民にはスポーツに対する熱量があり、スポーツに対して秘めた力を持つまちではないかと改めて感じている。

▽林崎委員

- ・先ほど石田委員からあった“スポーツを知る機会”という点は非常に重要であると感じている。資料2では“対象者”という欄があり、その“知る機会”がどこに該当するのか見ていたところ、「トップアスリートの試合観戦」という事業で“観戦者”という表記があるが、「インカレの開

催」は“大学生”となっている。プレーをする大学生が主な対象なのかもしれないが、インカレも“知る機会”のひとつだと思うので、“知る機会”＝“観戦者”を対象者に含めて計画を進めることも必要なのではないか。

7 閉 会